

2023 年 4 月

食料安全保障月報 (第 22 号)



令和 5 年 4 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 4 月食料安全保障月報（第 22 号）

目 次

概要編

I	2023 年 4 月の主な動き	1
II	2023 年 4 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「米国の穀物の作付け・生産と輸出動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の小麦の作付意向面積は前年度比 9 % 増加
	＜カナダ＞	2022/23 年度の春小麦・デュラム小麦の品質は良好
	＜豪州＞	2022/23 年度の生産量は史上最高の 39.0 百万トン
	＜EU27＞	2022/23 年度の輸出量はロシア等との競合により下方修正
	＜中国＞	2022/23 年度の輸入量は、豪州からの輸入が増加し上方修正
	＜ロシア＞	2022/23 年度の輸出量は史上最高の 45.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2022/23 年度の小麦の輸出量は EU 等への輸出増加から上方修正
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	2023/24 年度の作付意向面積は 3.9% 増加
	＜ブラジル＞	生産量は史上最高、輸出量は世界第 1 位の見通し
	＜アルゼンチン＞	干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）
	＜中国＞	生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し
	＜ウクライナ＞	ロシアによる侵攻により、生産量は前年度より 36% 減
3	コメ	15
	＜米国＞	2023/24 年度の作付面積は増加の見込み
	＜インド＞	2022/23 年度の実生産量・消費量とも史上最高の見込み
	＜中国＞	南部で早場米の作付け開始
	＜タイ＞	乾季米（全作付面積の約 2 割を占める）は作付面積の 7 割が収穫済
	＜ベトナム＞	冬春作の生育・収穫が進展。輸出価格は 2020 年 8 月以来の高水準

II 油糧種子	
大豆	21
＜米国＞	2023/24 年度の作付意向面積はほぼ前年並み
＜ブラジル＞	生産量、輸出量ともに史上最高の見通し
＜アルゼンチン＞	干ばつにより、生産量は対前年度 4 割減
＜中国＞	生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し
＜カナダ＞	2023/24 年度の生産量は収穫面積増で増産見込み

(参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2022/23 年度)・・・ 27

(参考 2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

(参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）

特別分析トピック

「世界食料需給の見通しについて」

【利用上の注意】

表紙写真：米国・ネブラスカ州でのとうもろこしの播種作業（4 月 4 日撮影）

(概要編)

I 2023 年 4 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫は終了し、南米では生育期から収穫期を迎えている。今後、北半球は 2023/24 年度の作付けを迎える。

品目別にみると、4 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、豪州やロシアの豊作で世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年 3 月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻前の水準まで戻している。ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意は 3 月に再延長されたが、延長期間の合意が得られておらず今後も注視が必要。

とうもろこしについては、ウクライナの減産に加え、米国や EU、アルゼンチンにおける乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度を下回る見通し。一方、大豆については、米国、アルゼンチンは減産も、ブラジルで増産となり、世界全体では前年度を上回る見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、2 月の 129.7 から、3 月(最新値)は 126.9 に下落（参考：2022 年 3 月 159.7、2021 年 3 月 119.2、2020 年 3 月 95.2）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値の約 9 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023 年 4 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の4月見通しによれば、ウクライナの2022/23年度の小麦の生産量は前月見通しから変更なく2,100万トン（対前年度比36%減）、輸出量は100万トン上方修正され1,450万トン（同23%減）の見通し。とうもろこしの生産量も前月見通しから変更なく、2,700万トン（同36%減）である一方、輸出量は前月見通しから200万トン上方修正され2,550万トン（同6%減）の見通し（参考1）。

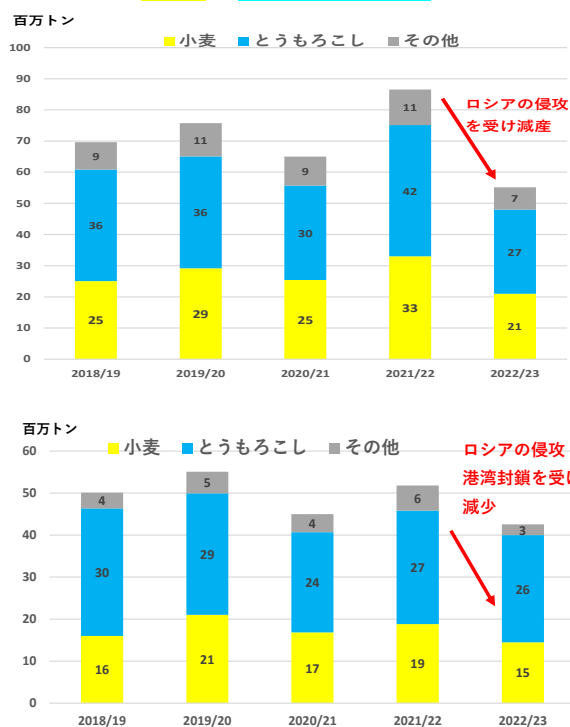
ウクライナ農業政策食料省による3月21日時点の予測によると、冬小麦の作付けがロシアの侵攻前であった2022/23年度と比較して減少したこと等から、2023/24年度の穀物・豆類の作付面積は2022/23年度比141万ヘクタール減の1,024万ヘクタール。そのうち、冬小麦は417万ヘクタール（同83万ヘクタール減）が作付けされ、春小麦は29万ヘクタール（同7万ヘクタール増）、とうもろこしは362万ヘクタール（同45万ヘクタール減）でそれぞれ作付け見込み。

同省による3月21日時点の2023/24年度の穀物等の生産量の見通しは4,430万トン（2022/23年度5,310万トン）。そのうち、小麦は1,660万トン（同2,050万トン）、とうもろこしは2,170万トン（同2,560万トン）の見通し。

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、前年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開され、2022年8月～23年3月累計の輸出量は2,649万トン（うち、とうもろこし1,321万トン、小麦723万トン他）。目的地は中国、スペイン、トルコ等。（参考2）。

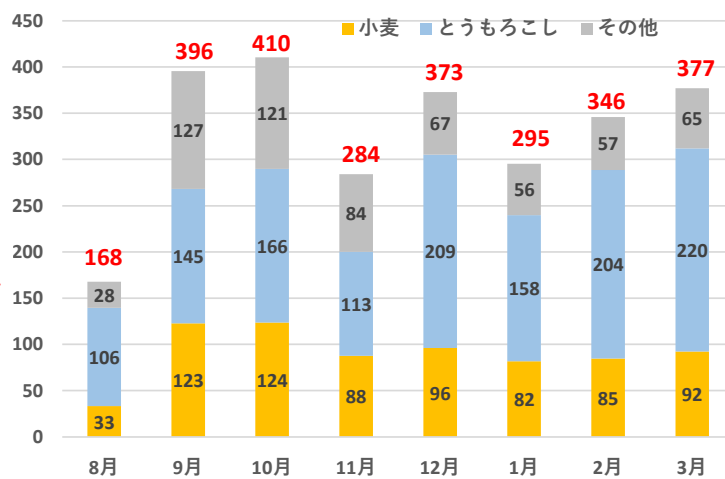
本合意（当初、前年11月18日まで、その後2023年3月18日まで延長）は、さらに3月19日以降延長されたものの、延長期間はウクライナは120日間、ロシアは60日間をそれぞれ主張している。5月中旬には、ロシアの主張する期限を迎える。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.4） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



注：その他はひまわり油・大麦など

陸路による輸出を除く。

1 中国の 2022/23 年度の小麦輸入量は増加し、世界一となる見通し

中国の 2022/23 年度の小麦輸入量については、米国農務省（USDA）によると、過去最高であった 1995/96 年度の 1,250 万トンに迫り、世界 1 位の 1,200 万トンの見通し。背景には、豪州の 3 年連続の豊作などにより、最近数か月、小麦の国際価格が 400 ドル/トン以下となり、中国国内での小麦やとうもろこしの取引価格を下回っていることがあるとされている。中国による豪州産小麦の前年 7 月から本年 2 月までの輸入量は前年同期比 66%増、カナダ産は同 83%増となっている。

一方、中国の 2022 年の小麦の生産量は史上最高の 1 億 3,770 万トン。現在生育中の冬小麦は、降雨には恵まれているものの、降雨過多による病害の懸念があるとされている。

なお、訪中したブラジル・ルーラ大統領と習近平国家主席が 4 月 14 日に会談し、ブラジル産の大豆、とうもろこしに続き、ソルガムやコメ等の輸入について検疫協議を進めることとなった。

2 アルゼンチンの穀物生産は干ばつで大きく減産

アルゼンチンでは、ラニーニャ現象の影響を受け、60 年に 1 度とも言われる干ばつが継続し、穀物・油糧種子の生産に大きく影響した。ブエノスアイレス穀物取引所週報（4 月 13 日）によると、一部で収穫が開始されたとうもろこしは 3,600 万トン（前年度比 31%減）、同じく収穫が開始された大豆は 2,500 万トン（同 44%減）と見込まれている。収穫が終了した小麦は 1,240 万トン（同 43%減）。

アルゼンチン政府は財政赤字の補填のため、大豆に最大 33%、とうもろこしに 12%などの輸出税を賦課している。これに加え、とうもろこしの国内向けの安定供給を確保するために、2022/23 年度は 2,000 万トンの輸出上限数量を設定している。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、45 億ドルの融資、7 億 5 千万ドルの減税、運転資金の支援のための 15 億ドルの割引手形を発行するなどの施策を公表した。さらに 4 月 10 日には各種税の支払猶予などの政策を追加で公表した。

また、大豆輸出については、4 月 10 日から 5 月 31 日までの間のうち 45 日間を超えない期間、通常のレート（1 ドル＝210 ペソ程度：4 月中旬）に対し、優遇為替レート（1 ドル＝300 ペソ）の適用をすることとなった。ただし、この優遇レートについては、昨年も 2 度実施されているが、今般の干ばつで大豆そのものの生産量が大幅に減産しており、業界はブラジル産輸入大豆に依存していることから、効果については疑問の声もある。

3 インドネシアは備蓄形成でコメ輸入増

USDA の 4 月見通しによれば、2022/23 年度のコメの生産見通しは前年度より 1 %減の 3,400 万精米トン。

インドネシアは世界 4 位のコメ生産国として、従来からコメをほぼ自給しており、コメの輸入量はここ数年、消費量の 2 %程度に当たる 50～60 万トン程度で推移。しかしながら、2022/23 年産米の減産と政府備蓄量の低下により、政府は、コメの非常用備蓄の積み増しを輸入で充当することを決定しており、2022/23 年度の輸入量は前年度の 2 倍以上の 175 万トン、輸入先国はタイやベトナムとみられる。

II 2023 年 4 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、3 月末、250 ドル/トン台半ばで推移。4 月に入り、黒海経由のウクライナ産穀物輸出の期間を巡る合意の不透明感がありながらも、米国主要小麦生産地での天候改善予報や、低調な輸出需要等から 240 ドル/トン台半ばに値を下げた。その後、ポーランド等東欧諸国によるウクライナ産の輸入禁止措置等から 250 ドル/トン台半ばに値を上げたものの、米国プレーンズでの降雨予報から値を下げ、4 月下旬現在、240 ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、3 月末、250 ドル/トン台後半で推移。米中西部での天候改善予報等から 250 ドル/トン台前半まで値を下げた。その後、ポーランド等によるウクライナ産の輸入禁止措置等から 260 ドル/トン台後半まで値を上げたものの、米国主産地での作付けに適した天候となるとの予報から値を下げ、4 月下旬現在、240 ドル/トン台半ばで推移。

コメは、3 月末、500 ドル/トン台半ばで推移。4 月に入り、インドネシア政府による買付増の見込みや、アセアン・アフリカ諸国からの需要の継続等から、4 月中旬に 520 ドル/トン台前後まで値を上げた。その後、需要の軟化により値を下げ、4 月下旬現在、510 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、3 月末、540 ドル/トン台前半で推移。3 月 31 日に米国農務省が発表した作付意向面積及び四半期在庫が市場予想を下回ったこと、4 月 2 日に OPEC プラスが発表した原油の追加減産の方針等を受け、550 ドル/トン台後半まで上昇。その後、ブラジルの豊作見通しや原油安等により下落し、4 月下旬現在、550 ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 370 万トン下方修正され 27.3 億トン。消費量は、前月予測から 120 万トン上方修正され 27.6 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.4%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.3 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、コメで上方修正も、小麦とうもろこしで下方修正され、4.8 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は 4 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.3 億トン。消費量は前年度を上回り 6.2 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り、18.8%となる見込み。

(注：数値は 4 月の USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：米国の穀物の作付け・生産と輸出動向

4月に入り、2023/24年度の米国のとうもろこしや大豆、春小麦などの作付けが開始された。3月末に公表された作付意向面積調査ではとうもろこし、小麦は前年度より増加する見通しで、今のところ作付け時の天候も良好とみられる。一方、輸出については、ロシアや豪州、ブラジルなどに押されている。米国の生産と輸出動向をまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、米国の小麦は2023年6月から2024年5月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 米国の作付け・生産動向

(1) 小麦

2023/24年度の作付意向面積は2018万ヘクタールと、前年度を9.0%上回り2015年以来の高水準となる見通し。特に生育期を迎えている冬小麦の作付面積は小麦相場の高騰などから前年度を12.8%上回る1,518万ヘクタールと大幅に増加した。一方、これから作付け期を迎える春小麦は2.3%減の428万ヘクタール、デュラム小麦は9.1%増の72万ヘクタールの見通し。

冬小麦の生育状況は、4月16日時点で出穂進捗率10%（前年同期7%）と進展している。4月4日時点の冬小麦の主産地の干ばつ比率は48%で、11月時点の75%よりは改善しているものの、作柄評価（良からやや良の比率）は27%と前年同期の32%を下回っている。

一方、春小麦の作付けは、4月16日時点では進捗率3%（前年同期8%）で、初期段階ではあるが前年と比べやや遅れている。

(2) とうもろこし

2023/24年度の作付意向面積は3,723万ヘクタールと前年度を3.8%上回る見通し。肥料価格の高騰等を受け減少した前年度から回復する見通し。主産地48州のうち40州で前年度から増加又は維持し、特に前年度豪雨で作付けできなかったノースダコタ州で増加した。

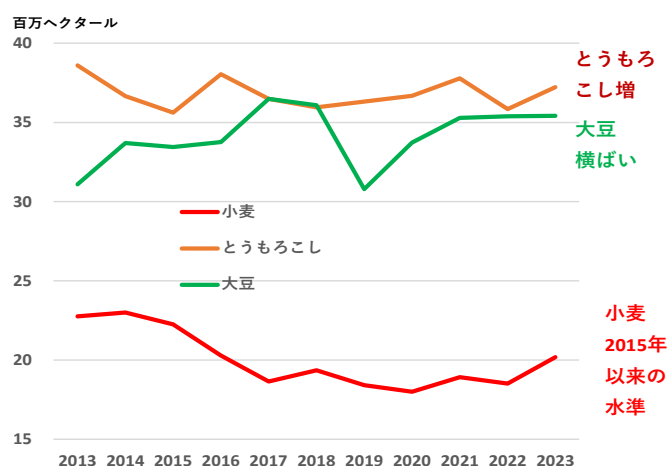
作付けは、4月16日時点で進捗率8%（前年同期4%）で、初期段階であるが前年と比べて進展している。

表1 米国の作付面積の推移（2023年は意向調査）

品目	2021	2022	2023	対前年比
大豆	3,529	3,539	3,541	0.1
とうもろこし	3,778	3,585	3,723	3.8
小麦	1,892	1,851	2,018	9.0
冬小麦	1,363	1,346	1,518	12.8
その他春小麦	462	438	428	▲2.3
デュラム	66	66	72	9.1
綿花	454	557	456	▲18.1
コメ	102	90	105	16.7
長粒種	80	73	79	8.2
中粒種	21	16	24	50.0
短粒種	1	1	1	0.0
菜種	87	90	92	2.2

出典：米国農務省「PS&D」（2023.3）を農林水産省で加工

図1 米国の小麦、とうもろこし、大豆の作付面積の推移



出典：米国農務省「作付意向面積調査（2023.3）」を農林水産省で加工

(3) 大豆

2023/24年度の作付意向面積は、3,541万ヘクタールと前年度をわずかに上回る見通し。前年度豪雨で作付けが大きく減少したノースダコタ州で回復したものの、インディアナ州などで大きく減少するなど主産地の中西部で伸び悩んだことが要因とみられている。

作付けは、4月16日時点では進捗率4%（前年同期1%）となっている。

2 米国の輸出動向と期末在庫率

(1) 小麦

2022/23年度の輸出量は、2年連続で生産量が低水準であったことを受け、前年度比3.2%減の2,109万トンとなる見込み。輸出価格が他の輸出国と比べ競争力が乏しいため、輸出量は伸び悩んでいる。

期末在庫率は31.9%とここ数年低下している。

(2) とうもろこし

2022/23年度の輸出量は、夏季の高温乾燥の影響を受けた減産により前年度比25.9%減の4,699万トンと大きく減少した。世界の輸出に占めるシェアでも、増産が見込まれるブラジルに抜かれ2位に転落する見込み。

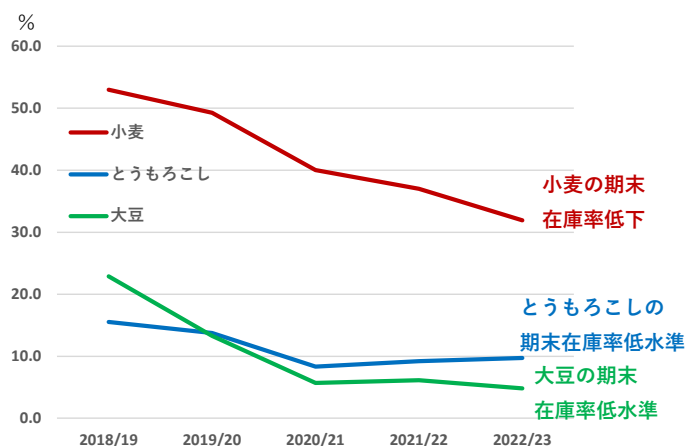
期末在庫率は9.7%と3年連続で10%を下回る低水準となっている。

(3) 大豆

2022/23年度の輸出量は、夏季の高温乾燥の影響を受けた減産により前年度比6.6%減の5,484万トンと減少した。世界の輸出に占めるシェアでもブラジルを大きく下回る見込み。

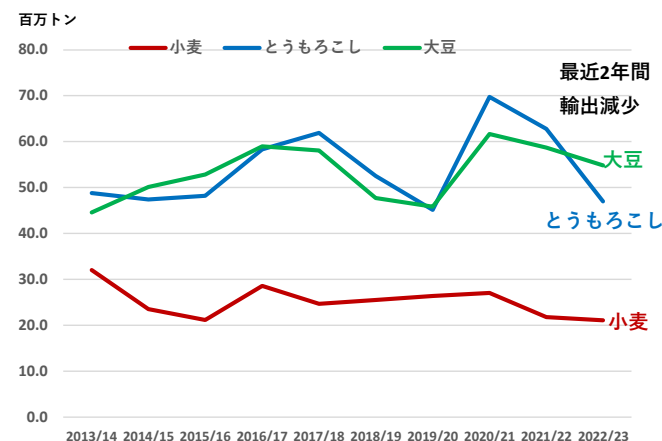
期末在庫率は4.8%と前年度期末在庫率（6.1%）を下回る低水準となっている。

図2 米国の小麦、とうもろこし、大豆の期末在庫率の推移



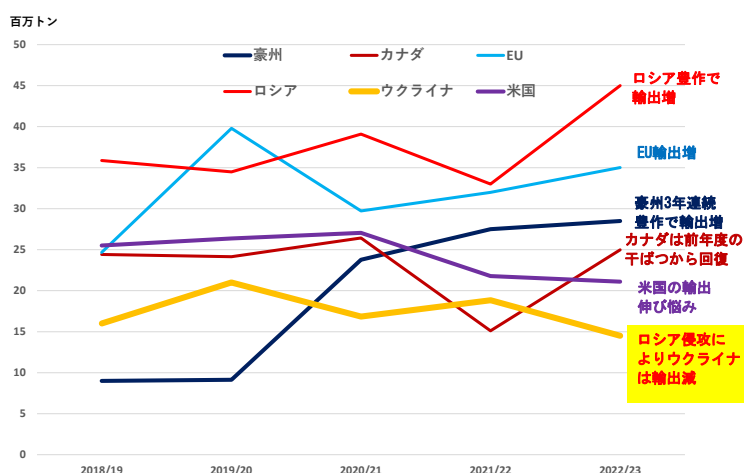
出典：米国農務省「PS&D」（2023.4）を農林水産省で加工

図3 米国の小麦、とうもろこし、大豆の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.4）を農林水産省で加工

図4 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.4）を農林水産省で加工

3 国際貿易の状況と輸入国の動向

(1) 小麦

輸出国では、史上最高の豊作となったロシアと3年連続豊作の豪州の輸出の増加が目立っている。ロシアは、輸出税の設定はあるものの、豊富な供給量を背景に、輸出価格について競争力があり、中近東向け輸出を増加させている。豪州は中国や東南アジアなど主要輸入国に地理的に近くフレートが安価になること等を背景として、2022年以降中国向け輸出を大幅に増加させている。

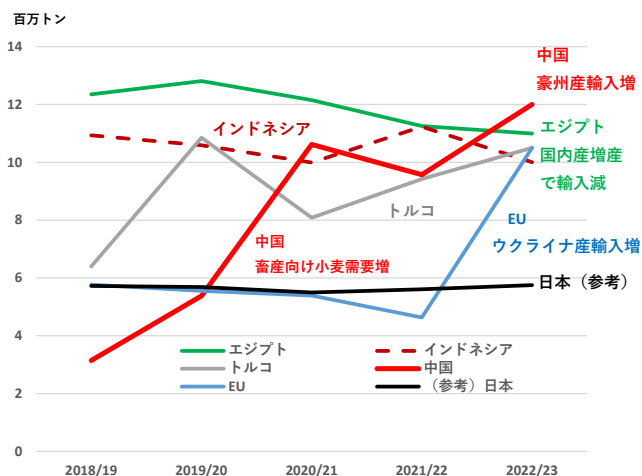
他の主要輸出国では、ロシアの侵攻を受けたウクライナと2年連続で生産量が低水準となった米国は輸出が減少するものの、小麦への干ばつ被害が少なかったEUや、2021/22年度の干ばつから一転して2022/23年度において天候に恵まれ増産となったカナダは輸出が増加する見通し。

主要輸入国では、USDAの4月見通しによると、中国が豪州産やカナダ産の輸入を増加させていることから、2022/23年度輸入量が1,200万トンとなり世界1位となる見通し。豪州等の主要輸出国の輸出価格が400ドル/トンを下回り、中国国内の小麦の取引価格の450ドル/トン、とうもろこしの取引価格400ドル/トンよりそれぞれ安価となり、飼料用としての小麦輸入が増えていることが要因。

以下、2位はエジプト(1,100万トン)、3位はトルコとEU(それぞれ1,050万トン)となっている。EUの小麦輸入増は、飼料向けにウクライナ産の輸入が増加したことが要因。

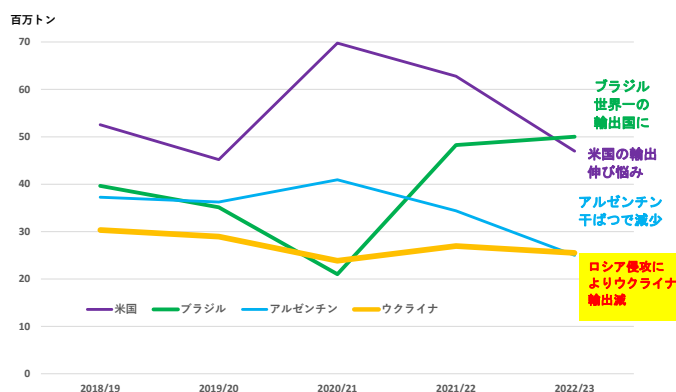
ただし、ウクライナと接するポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリアは、4月中旬に国内市場を保護するために、ウクライナ産農産物が国内市場に流入しないよう輸入を禁止した。なお、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア

図5 主要小麦輸入国の輸入量の推移（我が国9位）



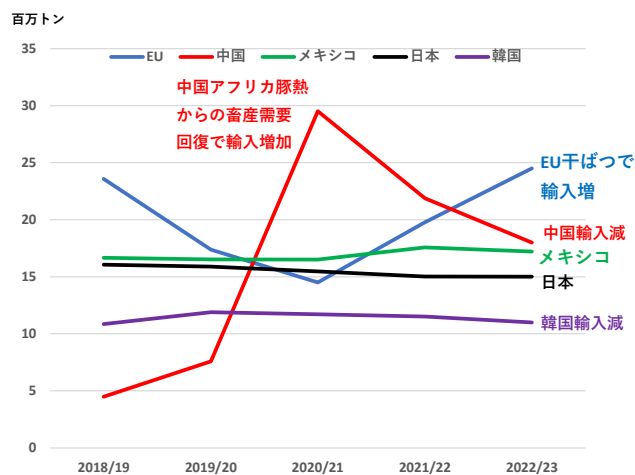
出典：米国農務省「PS&D」(2023.4)を農林水産省で加工

図6 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.4)を農林水産省で加工

図7 主要とうもろこし輸入国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.4)を農林水産省で加工

は、第3国向け（トランジット）のみ認めている。これに対し、欧州委員会は、輸入禁止対象を小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種に限定するなどの案を提示したところであり、今後のEU内での調整等の動向に注視する必要。

（2）とうもろこし

輸出国では、ブラジルが2年連続豊作見通しとなり、2022/23年度は、高温乾燥により減産となった米国を抜き、輸出量は5,000万トンと大豆とともに世界1位の輸出国になる見通し。前年末から中国向け輸出が開始されたが、本年の後半には輸出が本格化するとみられる。なお、主に輸出用として大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこしは、現在、主産地の中西部のマット・グロッソ州で生育期を迎えており、3月から5月の降雨が単収を左右するが、今のところ生育状況はおおむね順調である。

一方、2022/23年度のアルゼンチンでは、ラニーニャ現象による干ばつの影響を受けて大きく減産となることに伴い、輸出量も減少する見込み。アルゼンチンのとうもろこし輸出は、8月以降黒海経由で輸出を実施しているウクライナを下回り、4位になる見通し。

主要輸入国では、EUは、2022/23年度の干ばつによるとうもろこしの減産に伴い輸入が大きく増加し、2022/23年度に史上最高の豊作で輸入増が一段落した中国を抜いて1位となっている。EU、中国ともにウクライナ産とうもろこしの主要輸入国であり、動向に注視が必要。

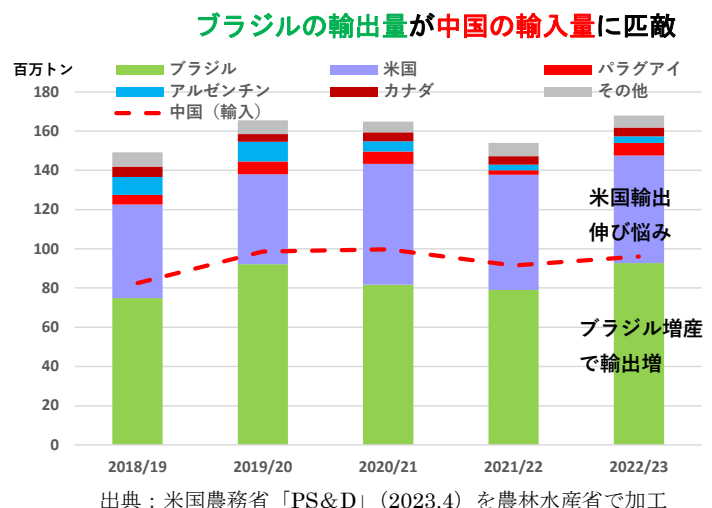
（3）大豆

輸出国では、ブラジルは、主産地のマット・グロッソ州等で生育期の適度な降雨に恵まれ、収穫も終了したことから、USDAの4月見通しによれば、2022/23年度の生産量が100万トン上方修正され1億5,400万トン、輸出量も前年度より大幅に増加し9,270万トンと、低調な米国の輸出量の減少分を補ってさらに余りある見通しとなり、世界の輸出量のうちブラジルが55%を占める見通し。一方、米国の輸出シェアは33%と大きく後退している。

他方、アルゼンチンはとうもろこし同様、干ばつの影響を受け、生産が減少するとともに、大豆粕、大豆油の加工向け輸入量が830万トンと大きく増加し、中国、EUに次ぐ世界3位の輸入国となる見通し。

なお、世界最大の輸入国である中国の2022/23年度の大豆輸入量は、9,600万トンの見通し。他方、2022年の海関統計では、大豆輸入量は前年比6%減の9,110万トンとなった。うち5,440万トンがブラジル産でシェアは6割。中国の習近平国家主席は、3月下旬にはロシア・プーチン大統領、4月上旬にはフランス・マクロン大統領、同月中旬にはブラジル・ルーラ大統領とそれぞれ会談した。いずれもウクライナ情勢や中国の農産物の安定的な輸入関連も含めて議論が行われたとみられる。特にブラジルに関しては、大豆のみならず、とうもろこしに続き、たんぱく飼料原料の輸入検疫に合意するとともに、ソルガムやコメなどの輸入についても検疫協議が促進されるとみられる。背景には、中国が穀物などの米国産の輸入比率を低下させる意向もあるとみられており、引き続き注視が必要。

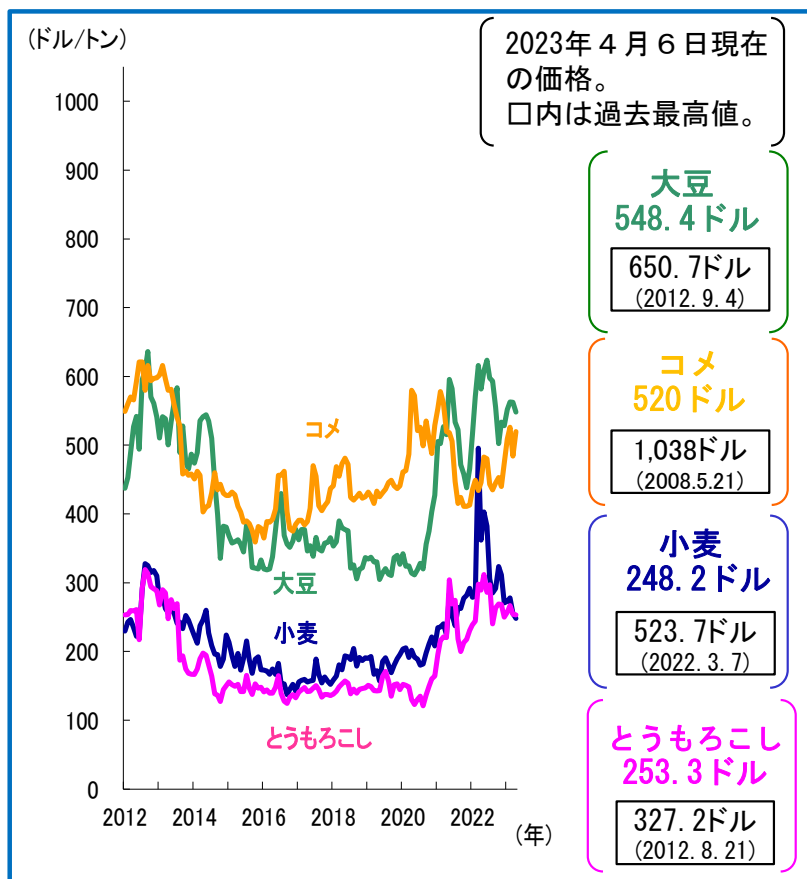
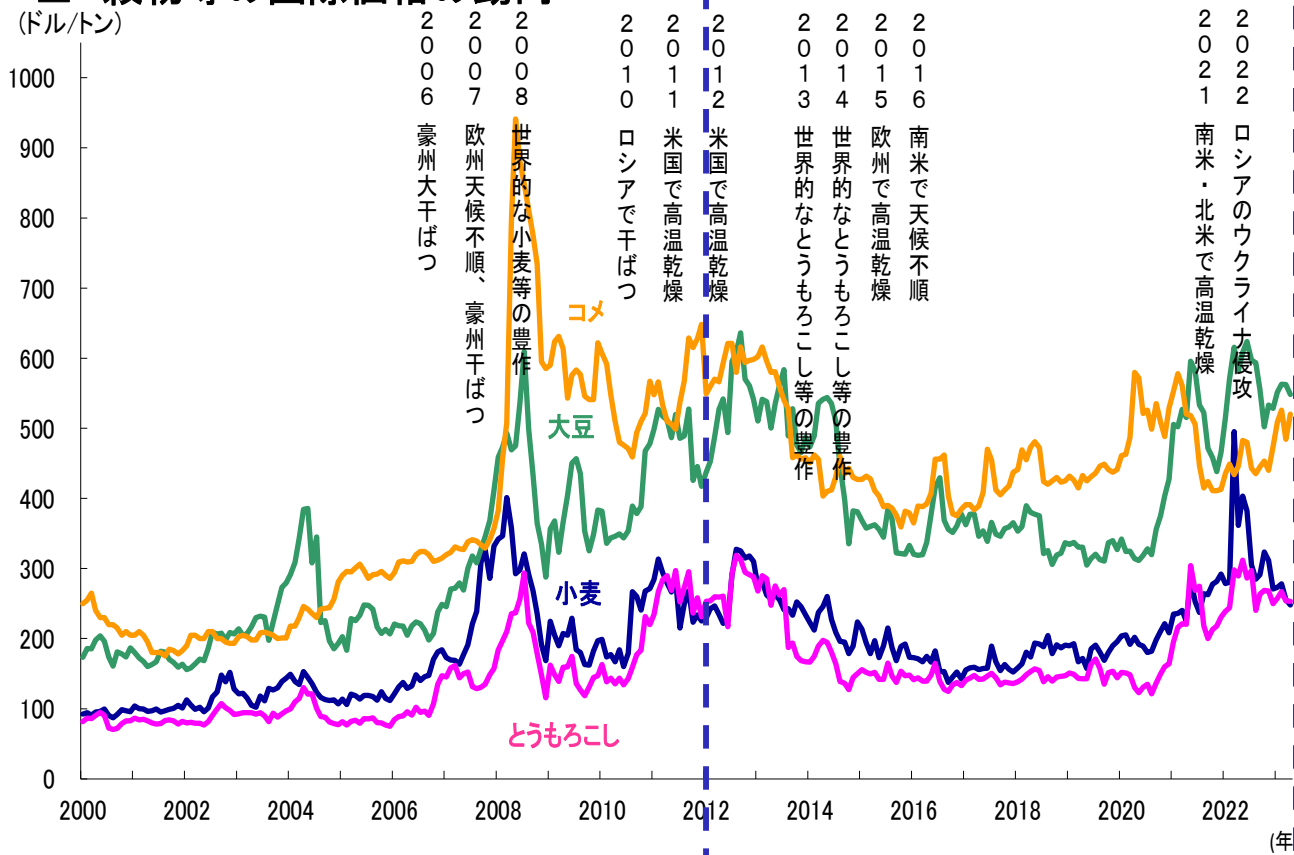
図8 主要大豆輸出国の輸出量の推移



資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下も、2022年9月以降、パキスタンの洪水やインドの輸出規制を背景に徐々に値を上げ、その後横ばいで推移。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



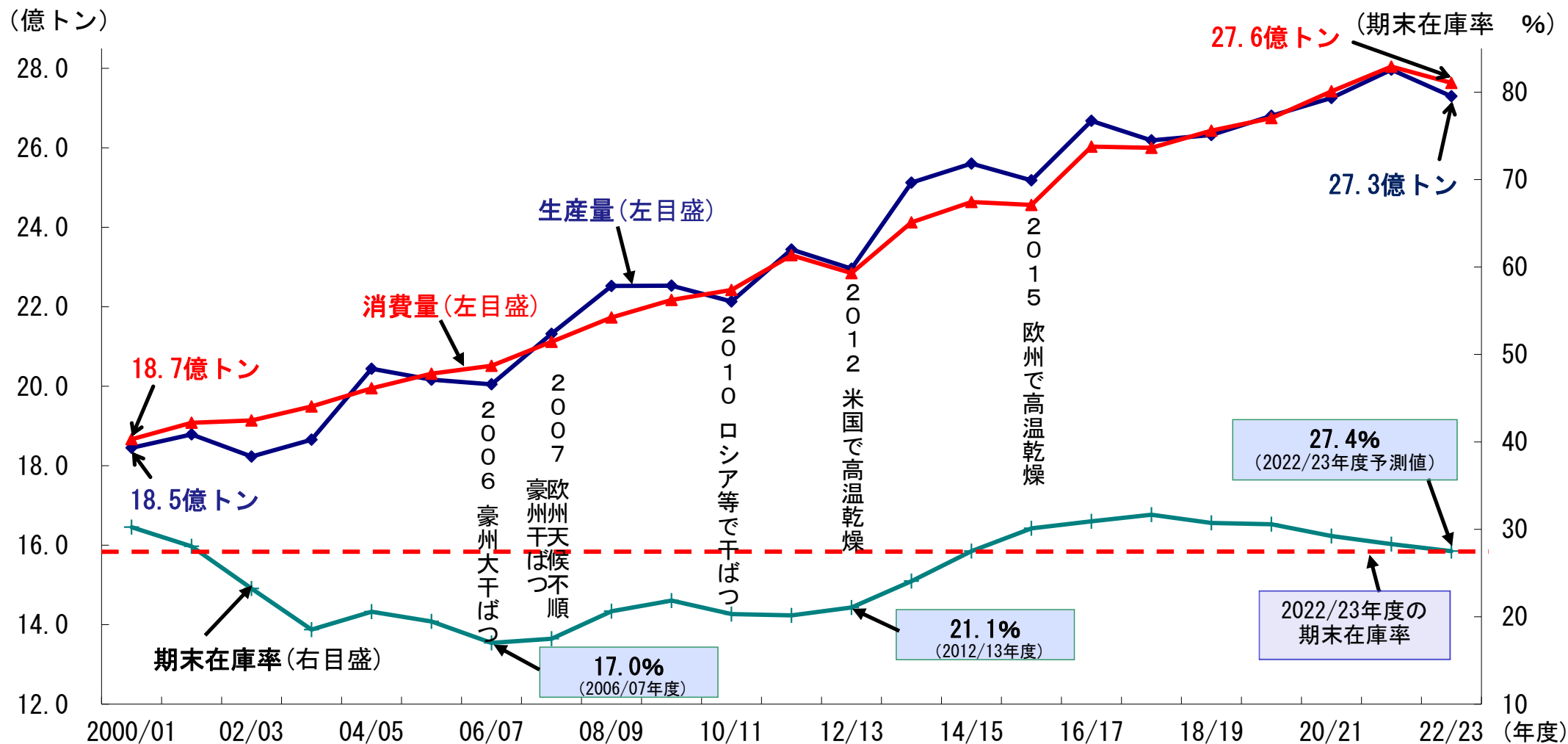
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セトルメント）である（但し、4月は7日が休場であったため、6日の価格）。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

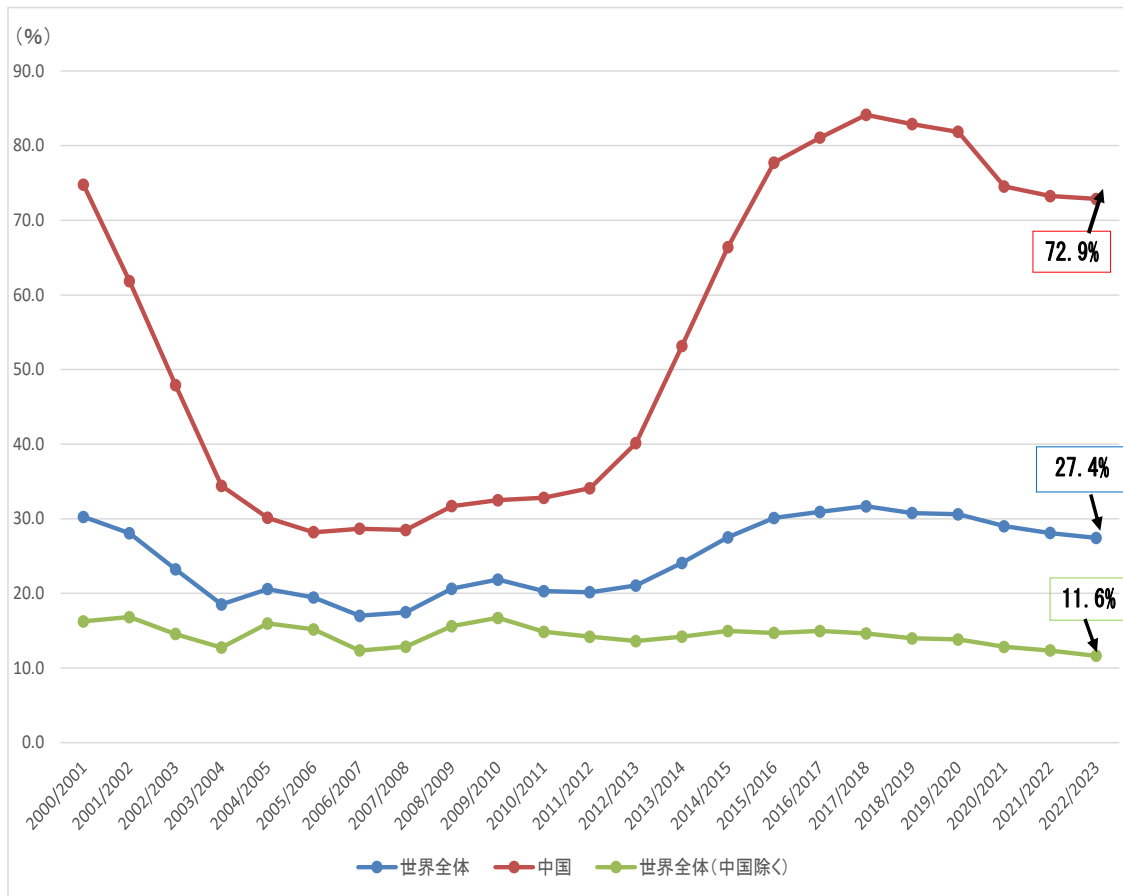


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(April 2023)、「PS&D」

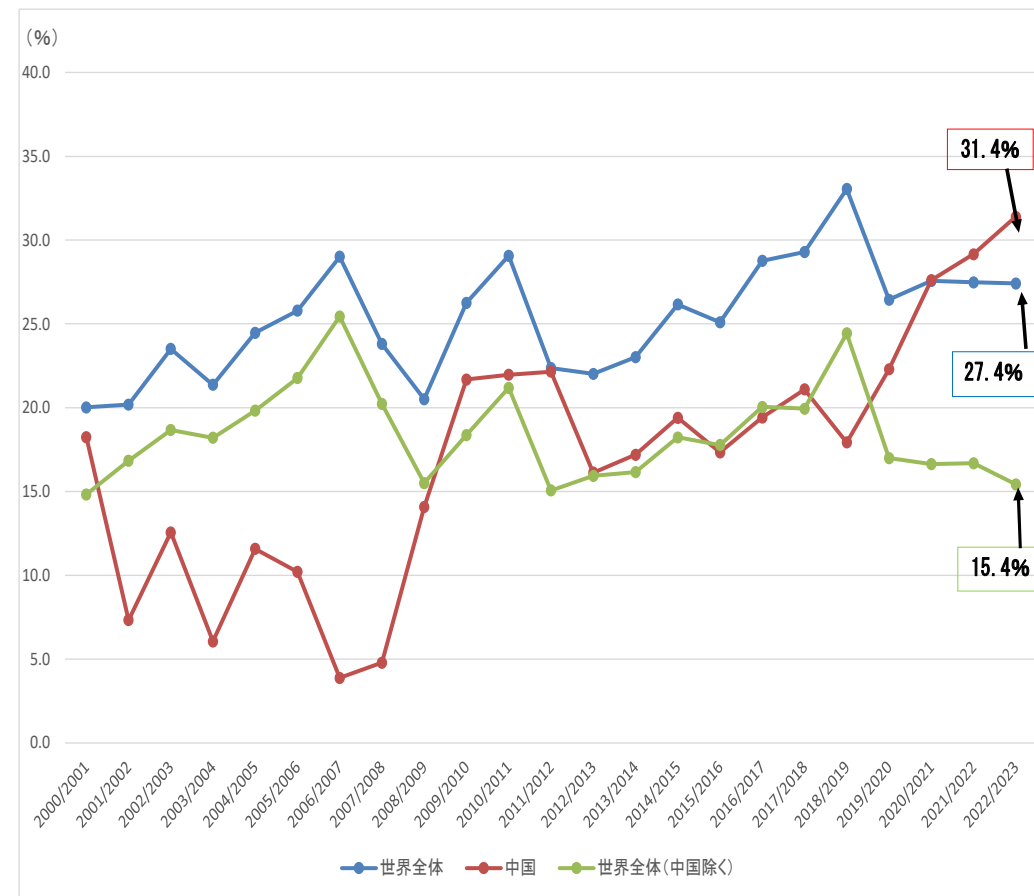
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。 — 10 —

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 11, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

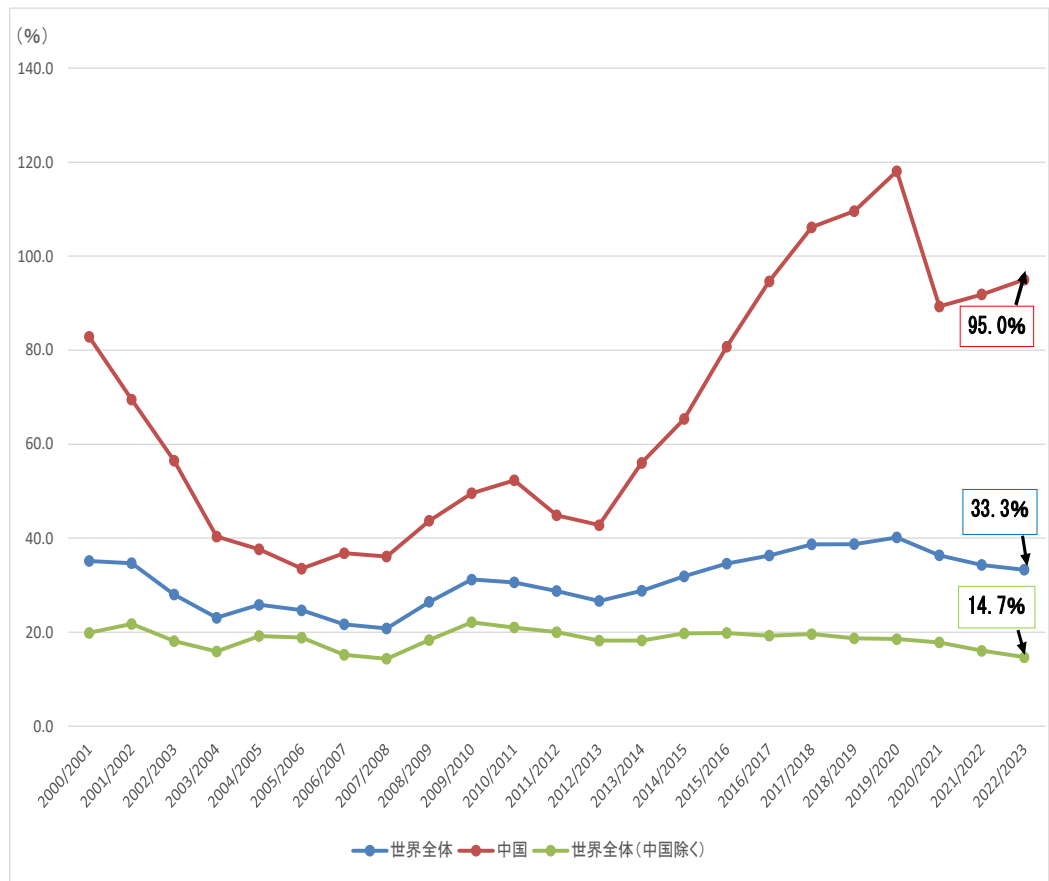
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

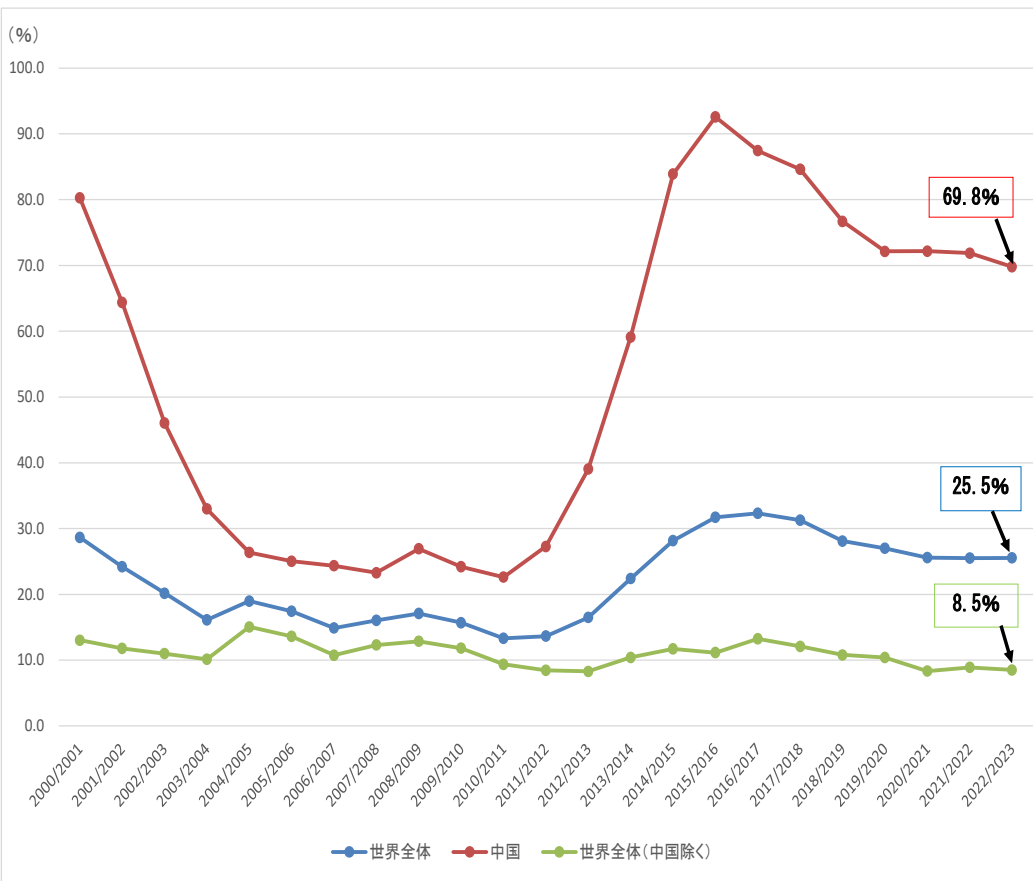
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移

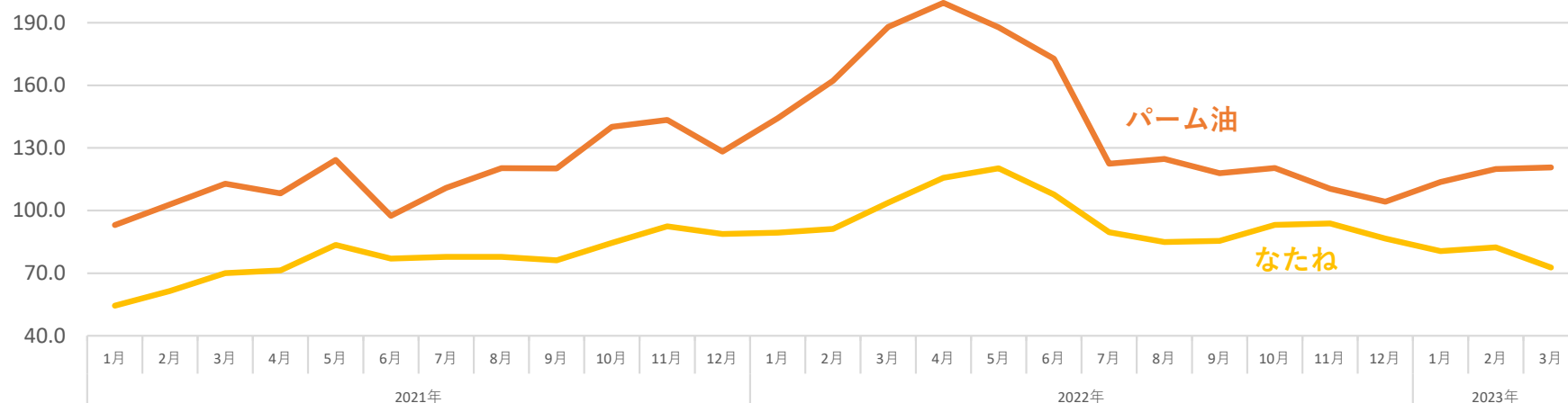


資料: 米国農務省「PS&D」(April 11, 2023)
 注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。
 2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100
 3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100
 4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年に熱波による減産があったが、2022年は回復基調から平年並みの収量に近づいた**。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。

(千円/トン)

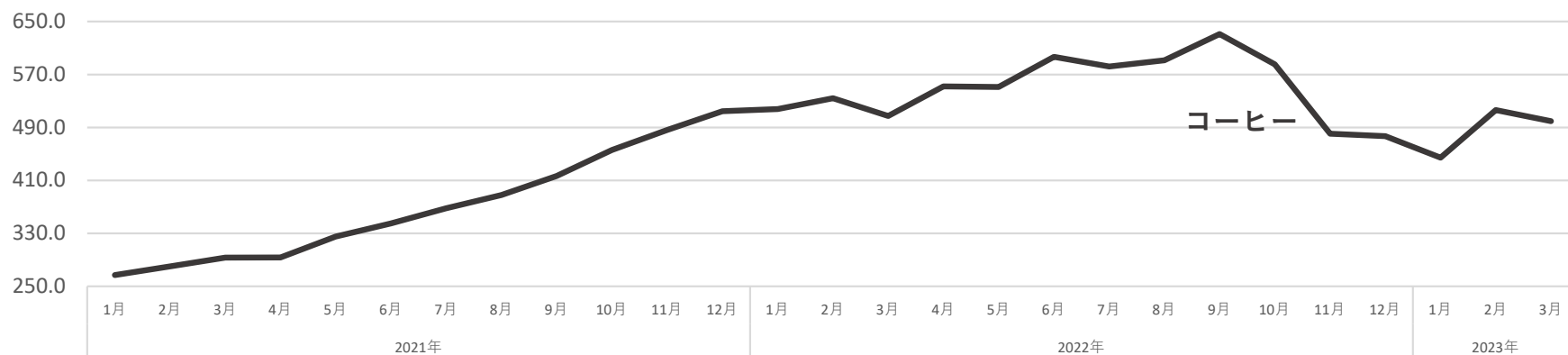


2023年4月20日現在
□内は2020年4月以降の最高値。

パーム油
120.6 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
72.8千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

(千円/トン)



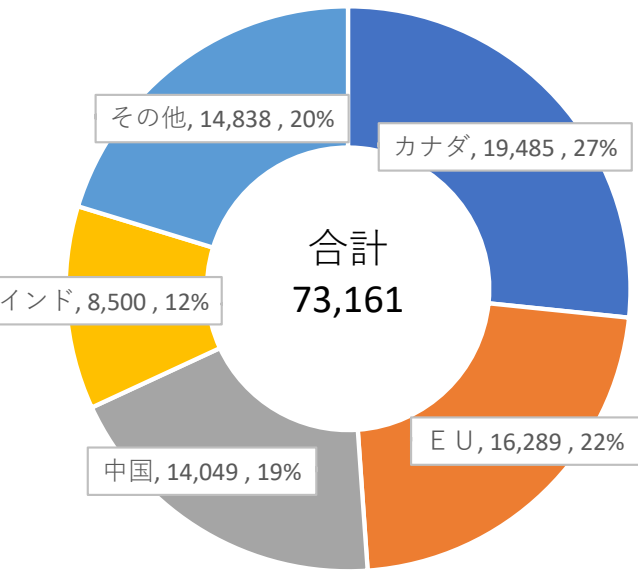
コーヒー
499.6千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

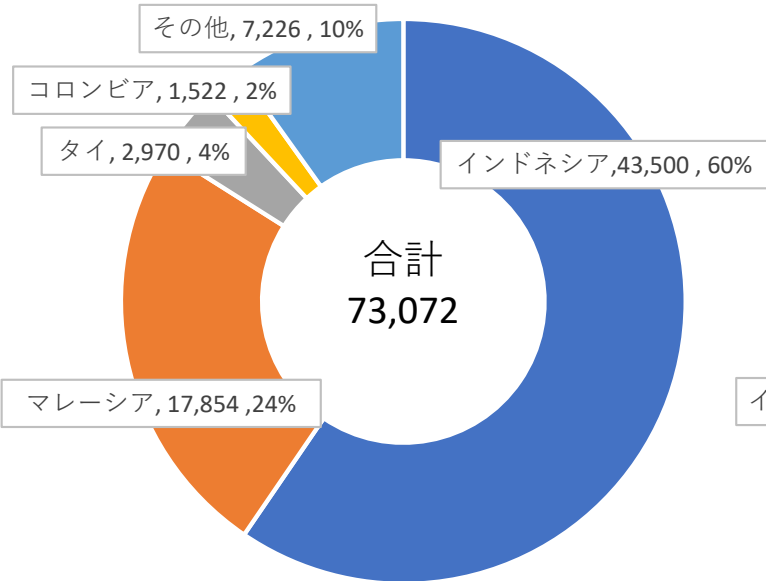
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



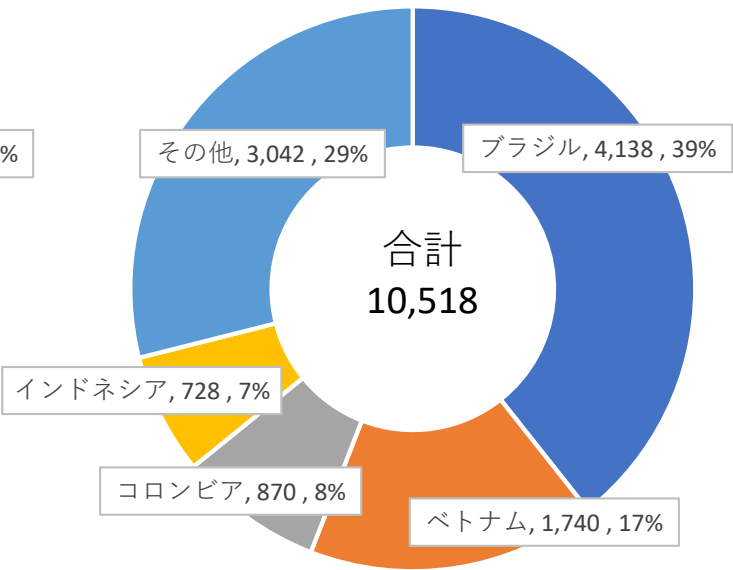
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
 注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
 2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年3月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.9～164.3（前年同月比で－0.9%～24.3%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年10月～令和5年3月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4			R5			
品目	平均	平均	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	113.7	114.2	114.1	115.0	115.0	114.3	6.7%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	112.3	114.2	111.6	113.1	114.6	113.1	12.2%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	108.3	109.1	109.9	110.3	110.4	112.0	8.8%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	160.2	162.7	162.5	164.0	163.9	164.3	24.3%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	103.6	104.9	104.4	104.5	105.9	106.5	6.5%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	133.7	136.1	137.4	137.3	137.2	139.0	15.6%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	117.1	118.6	117.5	119.2	121.4	121.9	22.7%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	98.8	98.5	98.7	98.6	98.6	98.9	－0.9%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	106.7	107.9	108.3	108.7	109.4	110.2	8.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年10月～令和5年4月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4			R5					
品目	平均	平均	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	110.9	111.3	112.2	111.5	110.7	111.3	111.3	0.0%	5.9%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	110.0	110.6	110.6	111.2	111.2	110.6	110.6	0.0%	11.7%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	107.2	107.2	107.6	108.5	108.1	110.2	113.7	3.2%	11.9%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	160.6	161.2	161.2	162.2	162.2	161.9	161.2	-0.4%	24.4%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	102.5	102.7	102.7	102.3	103.4	103.6	105.2	1.5%	6.3%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	126.2	128.9	128.3	129.6	128.9	130.3	137.9	5.8%	17.7%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	114.4	115.4	110.9	116.9	118.4	117.9	129.3	9.7%	23.1%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	98.4	108.9	10.7%	9.7%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2023年5月号（4月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）低調な牛肉輸出、今後も継続と予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002703.html

（カナダ）雌牛を中心に総飼養頭数が減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002704.html

（豪州）降雨量の減少予測などを背景に、肉牛価格は下落傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002705.html

（ウルグアイ）22年の牛肉輸出量は後半減速し、前年比8.5%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002706.html

◆豚肉

（EU）繁殖母豚頭数は3年連続の減少、豚肉生産量は減少基調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002707.html

◆鶏肉

（タイ）22年の鶏肉生産量および輸出量は増加も鶏肉価格は下落傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002708.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳価はピーク時から下落基調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002709.html

（EU）生乳出荷量は5カ月連続で前年同月を上回り、乳価は下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002710.html

（NZ）22/23年度の生乳生産量、シーズン後半で好調に転じる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002711.html

（中国）乳製品需給の緩和から乳価の下落傾向強まる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002712.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）ブラジルと米国の輸出量の差が拡大し、5000万トンを見込む

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002718.html

（世界：大豆）大豆期末在庫は1億トン台を維持も、アルゼンチンは3カ月連続下方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002719.html

（米国）米国の輸出量は前月から下方修正され、期末在庫は若干回復

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002720.html

（ブラジル）2022/23年度トウモロコシ、大豆生産は作業遅れが見られるものの、過去最大の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002722.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002721.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料:FAO「Food Price Index」(2023.4)より作成

注:穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等